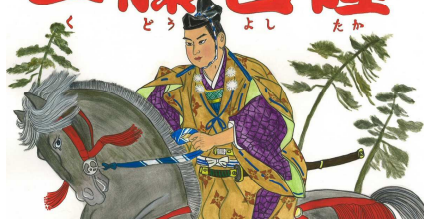


工藤吉隆



今日のお話しは、工藤吉隆殿のお話しです。
工藤吉隆殿という人は、今の千葉県ちばけんの南の方
に住んでいた方で、四条金吾・池上宗仲らと
ともに、大聖人様の教えを信じて、様々な
迫害や難を受けながらも、信じ抜いていった
強信者であります。

大聖人様が伊豆に流罪になられた時も、わ
ざわざ「四恩抄」を工藤吉隆殿に送られてお
ります。それは、工藤吉隆殿がいつも大聖人
様にお仕え申し上げ、伊豆に御流罪中も、お
こたらずに音信を差し上げていたからである
うと思われます。

工藤吉隆殿は、大聖人様の四つの大難の中
の一つである、小松原の法難において、大聖
人様を命をかけておまもり申し上げ、亡くな
られてしまいましたが、不自借身命の信心を、
身をもつて示された後世に語り継がれる立派
な信心を貫いた武士でした。その工藤吉隆殿
の姿を通して、信心を見習っていきましょう。
では始めます。



にちれんだいしようにんさま
日蓮大聖人様の信徒の一人であつた工藤吉隆殿は、今の千葉県の南の方、天津あまつという、大聖人様がお生まれになつたところのすぐ近くの領主りょうしゅで、人々から大變したわれ、とてもりっぱな武士でした。

そのころの日本は、飢饉・疫病・大地震・大火災だいかさいなど、人々は苦しみのどん底でした。大聖人様は、その苦しみを救うため、立正安国論を顕あらわして、幕府ばくふに差し出しました。

その立正安国論には、その理由を、
一に、みなが南無妙法蓮華經の正法しょうぼうに背そむき、
念仏等の悪法あくほうを信じているから。

二に、その故ゆゑに、人々を守る善い神様は、この国を捨てどこかへ行つてしまつたから。

三に、その変わりに、悪鬼魔神あくきまじんが住み込んで、
災難さいなんが起こる。

と、明確めいかくにまちがつた教えを信じている限り
災難が起こると示されました。

工藤吉隆殿もこの大聖人様の教えを心から
信じました。



立正安国論を受け取った北条時頼ほうじょうときよりは、大聖人様の言われることを信じませんでした。

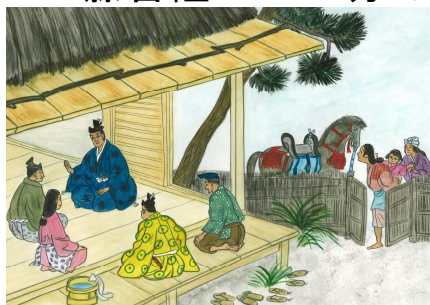
逆に念仏の僧侶たちと手を結び、大聖人様に敵対てきたいしていきました。

しかし、大聖人様が幕府ばくふをいさめたことと、鎌倉での折伏により、人々は次第に大聖人様を注目しはじめていきました。そして、

「念仏ねんぶつは無間地獄むげんじごくの教え、禅宗ぜんしゅうは天魔てんまの教え、真言しんごんは国が滅亡めつぼうする教え、律宗りつしゅうは国賊こくぞくの教え」と厳きびしく破折はしやくする正義しやうぎの声に対し、大聖人様を亡なき者にしようと、陰湿いんしつな策謀さくぼうがひそかに進められました。

そしてとうとう、立正安国論を提出してから四十日目の八月二十七日、幕府の役人たちと、念仏の僧侶たちとが、松葉ヶ谷まつばがやつの大聖人様のお住まいを襲撃しゅうげきし、大聖人様を殺害さつがいしようとしたのでありました。

しかし、大聖人様は諸天善神しよてんぜんじんの御計おんはからいによつて、不思議にもその襲撃をのがれることができました。



工藤吉隆殿をはじめ、大聖人様の教えを信じていた人々は、大變に悔しがりました。しかし、幕府の権力に齒向かうことはできませんでした。

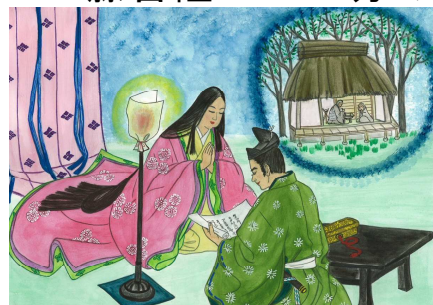
その後も、仏法の正邪をハッキリと言う、大聖人様への風当たりは、ますますひどくなり、特に、念仏の僧侶たちは、幕府の権力者に取り入って、大聖人様を無実の罪で、伊豆へ流罪にしてしまいました。

そのことによつて、疑いを持ち、信心をやめてしまう者も出てきました。

そうした中、工藤吉隆殿は、一人ひとりの家を訪問しながら、

「大聖人様の南無妙法蓮華經によつてのみ、苦しみを乗り越えて、真実の幸せを得られるのです。今こそ、その時です。一生懸命に信心に励んで行きましょう」と、みんなを励まし続けました。

家庭訪問で人々を勇気付け、励まし合いながら、信心を持続していきました。



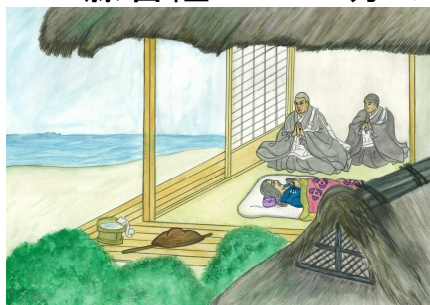
毎日、大聖人様のお身体からだを心配されていた
工藤吉隆殿の元へ、伊豆に流罪中の大聖人様
からお手紙が届きました。後の人がそのお手
紙の内容から「四恩抄しおんしやう」と名付けました。と
ても有名な御書です。

そのお手紙には、二つの大事なことが書か
れていました。

一つは、流罪のような難なんにあうことは、法
華經を身みで読むことであり、自身の宿業しゆくごうを消
滅めつする上で、大変な悦よろこびであること。そして、
真実の恩おんに報むくいる道は、一切衆生の恩いっさいしゆじやう、父母
の恩、国主こくしゆの恩、仏法僧の三宝ぶつぽうそうさんぽうの恩、という
四つの恩に報むくいていくことが、第一の悦よろこびで
ある。と説かれていました。

もう一つは、大聖人様を誹謗ひぼうする国中の人
々に、無間地獄へ墜おちる因いんを造つくらせてしまつ
たことに対する慈悲じひの嘆なげきでありました。

御流罪の身でありながら、御自身のことよ
りも、全ての人々を思われる、大聖人様の
慈悲を、工藤吉隆殿は身に染しみて感じました。



大聖人様は、伊豆に御流罪になつてから、一年九ヶ月ぶりに許ゆるされて、鎌倉に帰つてきましたが、人々の苦しみは、一向いっこうにおさまりませんでした。

翌年、大聖人様の元へ、母親の病気が大變に重いという知らせが入りました。

その地は、大聖人様が立宗宣言りっしゅうせんげん以来、お命をねらつてゐる東条景信とうじょうかげのぶが地頭じとうをしているところですが、我が身を省みずかえり、母親の病氣平癒ゆのために、故郷こきやうへ帰られました。

大聖人様が帰り着かれた時、母親はまさに臨終りんじゆうを迎える状態でありましたが、

「南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經」

と唱える、大聖人様の母親への孝養こうやうの一念いちねんは、母親の病氣を快復かいふくさせ、さらに四年の寿命じゅみやうを延ばすことができました。

大聖人様の祈りによつて、母親の病氣は治なおりましたが、この地の折伏のために、しばらくここにどまつて、布教ふきやうすることになりました。



工藤吉隆殿は、大聖人様が帰られていることを聞き、心から喜びました。そして、是非とも自分の家へおこしいただき、御法話をいただきたいと、大聖人様に願い出られました。大聖人様はそのおさそいに、こころよく応じて下さいました。

文永元年十一月十一日、夕日の美しい日でした。大聖人様をお迎えする準備のすつかり整った吉隆殿は、

「途中まで大聖人様をお迎えに行つてきます」と、出かけようとしたところへ、村の者が、
「東条景信とその家来数百人が大聖人様たちを皆殺しにしようと、小松原に向かったそうです」

そのうえ、

「大聖人様たちは、十五六人のお弟子の方々と、その小松原を通りかかる頃です」と、緊急事態を教えに来ました。



とうじょうかげのぶ
東条景信はいつか大聖人様を亡き者にしよう
と、襲撃しゅうげきのチャンスを狙ねっていました。
そして、とうとう小松原で大聖人様たちを
待ち伏せして、襲撃する準備をととのえまし
た。

東条景信たちが、大聖人様たちを殺そうと、
息いきをひそめてじつとかくれているところへ、
大聖人様たちは何も知らずに、通りかかりま
した。

見ての通り、大聖人様たちは、武器ぶきなど誰だれ
も持っていないせん。それにたった十五六人。
かたや、東条景信たちは数百名という大勢おおぜい
で、みな手には弓ゆみや刀かたなや槍やりをもっていまし
た。



「皆殺しにしろ！」

「生きてここを通すでないぞ！」

東条景信とうじょうかげのぶたちは狂くるったように、叫さけびながら、

大聖人様たちに襲おそいかかってきました。

矢やを放はなち、刀かたなで斬きりつけ、やりで突つき刺さ

してきました。

小松原こまつばらはアツと言う間に、戦場せんじょうと化かしてい

ました。

そこへ、急きゆうを聞きつけた工藤吉隆殿くどうよしただかたち

が駆かけ付けました。

吉隆殿よしただかは、敵の中に飛び込み、大聖人様を

お護まもりしようと、必死ひっしで戦たたかいました。



東条景信とうじょうかげのぶは刀を振りかざして、大聖人様めがけて斬きりかかってきました。大聖人様はとっさに、お数珠じゆずで打ち払はらいましたが、額ひたいにキズを受けてしまいました。また、左の手を骨折こっせつされる大けがをされました。

鏡忍房きやうにんぼうというお弟子の一人は、飛んでくる矢から大聖人様をお護りするため、その矢面やおもてに立って、亡くなってしまいました。

吉隆殿は、

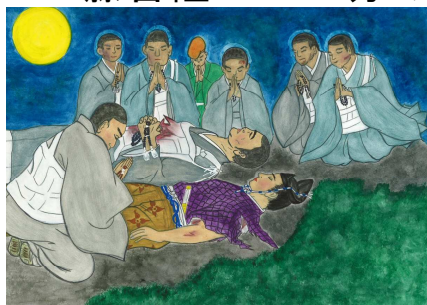
「大聖人様。どうぞこちらへ」

と、右に左に敵を払いのけ、やっと安全な場所へお連れ致しました。

そして再び敵の中に飛び込み、大聖人様たち逃げられるように、一人戦いました。

「エイッ、ヤアー」

しかし、敵はあまりにおおぜいです。とうとう吉隆殿は力尽ちからつき、戦死せんししてしまいました。

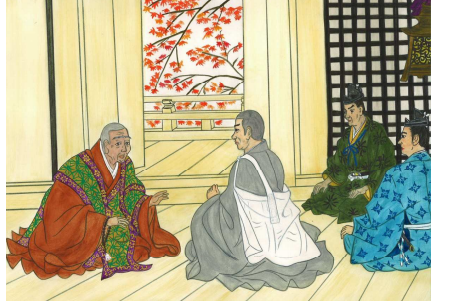


大聖人様は、自分を命をかけて護まもられた、
鏡忍房きょうにんぼうと工藤吉隆殿が亡くなられたことを、
とても悲しみ、歎なげかれました。

そして、特に俗人ぞくじんでありながら仏法を護る
ために、自らの命をなげうつて戦い抜いた吉
隆殿に、戒名かいみょう「妙隆院日玉上人みょうりゅういんにちぎよくしょうにん」というお名
前あたを与えられ、手厚てあついお葬式そうしきを行い、その信
心の姿をおほめになりました。

工藤吉隆殿が、どんな迫害はくがいにも負けずに、
我が命に代かえてお護まもり申し上げた不惜身命ふしやくしんみょうの
姿は、後々のちのちまで私たち法華講員の信心の鑑かがみ
としていく尊とうといお姿でした。

この法難ほうなんを地名ちめいにちなんで、小松原こまつばらの法難ほうなん
と申しております。



大聖人様は、その小松原の法難で、左手を骨折し、額に深手の傷を受け、その傷は、治ったあとも四寸、約12cmの傷跡が残るほどの重傷でした。

しかし、キズをものともせず、小松原の法難の三日後、大聖人様の師匠である道善房に会い、厳しく念仏の破折をされ、南無妙法蓮華經の信仰に帰依するように折伏しました。

工藤吉隆殿が、師匠である大聖人様を命がけでお護りし、師匠への報恩の姿を示されたのは、そのような大聖人様のお姿を、常に拝し、教えられていたからだと深く感じられます。

信心を姿から学ぶことは数多くあります。お父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃん、子供たちに信心をその姿で教えていけるように、また、子供たちはその姿を見習って、信心をきちんと受け継いでいけるように、しっかりと信心していきましょう。

以上で終わります。